

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

家を継ぐ者の大変なことも昔の語り種として遠
退きぬ (長野市) 池田よし江
早逝の夫の自由に真つ直ぐに生きし思えば我は泣
かずに (千曲市) 倉石みつる
中三はいま能面のごときなりバックしながら数式
を解く (千曲市) 関 津和子
雷が空へとつける傷を見るひび割ればかりでも生
きていて (松本市) 飛 和
ちいさなる開花予報の体なして年金通知わが名を
記す (長野市) 北沢 京子
過疎に住む旧友と膝交えれば惨めに非ず夢に溢る
る (伊那市) 赤羽 正彦
すり硝子のやうなる肺を患ひたり墮下より聞こゆ
る重たき咳に (千曲市) 中村 美樹
「しほれるよ」と玄関で脱いだ作業着を夫よすま
ぬと指につまみぬ (長野市) 竹内ゆかり
カラオケで我に合はせてハモる妻に合はせて我
はハモれず (箕輪町) 向山 政俊
野菜高ベジタリアンは畑仕事妻よコーンと餅や鎌
持ち (長野市) 青木 武明
佳作
亡夫の友今わたくしのペンフレンドその折々の良
寛の歌 (小布施町) 市村志津枝
大奥さが我に染み込み吐く息も靴下までも同化し
ていく (千曲市) 石黒 信幸

第一首、家ごとのしきたりや共同体で
の役割などが多かった時代に家を継ぐこ
とがどれほど大変だったか。良くも悪く
もそれが想像さえできない時代に。第二
首、その生き方を「自由に真つすぐに」
と肯定できる夫との日々、幸せだったに
違いない。第三首、ユーモラス。バック
しているから女の子とは言い切れない時
代。第四首、雷は人間の中の不安感のよ
う。他者への、そして自分への祈りか。

選 評

小池 光 選

ぐくぐくと水豪快に落ち行けり八十路過ぎたる老
農の喉 (駒ヶ根市) 小本曾文彦
新米に塩辛乗せて喰らひたる稽古終はりの少年力
士 (小諸市) 加藤 陽介
蟻地獄共に探せし幼き日我も少女も八十路となり
ぬ (飯綱町) 坂井 寿男
熊がまたあるから注意と繰り返す防災無線を熊も
聞いてる (飯山市) 小野沢竹次
戦時下を健気に生きた兄妹の「火垂るの墓」に涙
が滲む (御代田町) 柳沢 光雄
術後の視力測りてくれし看護師さんの「活躍を
の励まし嬉し (伊那市) 堀米 好美
葛の蔓は抱きつく相手を探しつつ先へ先へとその
手を伸ばす (泰阜村) 松島 房子
帰宅して五分もせぬうち大夕立にも無かったよ
うな引き際 (千曲市) 関 津和子
算符行行かなくなり二十年机の奥より熊避けの
鈴 (小布施町) 市村 憲彦
葬儀社の人ははこんなに暑い日もみのむしのごと
喪衣着ており (長野市) せきたつお
佳作
鉛とふ文字思ひつつ投入口にコイン落してボタン
押すとき (安曇野市) 一志みゆき
このひもで何人おんぶしたのだから感泣においてま
だながめてる (佐久市) 橋詰美代子

第一首、水はいのちのみなもと。それを
をぐくぐくと飲み干す80代の喉。これも
生きるあかし。生命のエネルギーが迫力
をもって伝わってくる。第二首、この歌
も生きるエネルギーがいっぱい。相撲の
稽古が終わっておなかペコペコ。新米に
塩辛をのせただけで豪快に食べつくす。
がんばれ少年力士。第三首、こども時代
の思い出。一緒にアリジゴクを探したも
のだった。昨日のことのように思い出す。

選 評

小島 なお 選

モンブランは近きにありて遠きもの母居ぬ二度目
の秋の菓子店 (東御市) 渡辺美保子
天頂に吊り上ぐる糸のあるやらむ白鷺の頸直ぐに
伸びをり (安曇野市) 東野 行岳
妙高山の頭を過り飛行機はクリオネのごと蒼天を
行く (佐久市) 赤岡 厚子
観覧車を回すあなたと我々を天辺で止め昼寝でも
せよ (松本市) 美甘 欽
真いたる山の胡桃をやっと割るとんな意味ある仕
切りの多さ (佐久穂町) 石田 弘子
夏が来て冬来りなば夏が来て前とは違ふ夏であり
たい (東御市) 竹内 幸彦
絶景を観ているだろう満席の客が観ているあの銀
幕は (堀尻市) いずみはる
あの日からあなたの死後を生きている実体のない
この世という船 (佐久市) 高橋衣里子
アメシロの巣くひし柿の枝目につきてラジオ体操
リズム乱さる (伊那市) 堀米 好美
友の死の子細は如何に雌日芝の波打つ夜半に語ら
す虫 (南箕輪村) 堀沢 豪
佳作
天狗山荘売店おにぎりパンになり八ヶ岳連峰を猛
暑が襲う (軽井沢町) 神戸 英明
猛暑日に平茶碗にてちようだいす湖丸ごと飲み干
す気分 (千曲市) 沢 千枝

第一首、母の好物だったのだろう。す
ぐ近くにあるはずなのに、今年の秋の悲
しみが足を遠ざける。第二首、めぐりの時
が静止したようなシラサギの佇まい。
操り糸の先の遙かな手を思う。第三首、
高々とそびえる妙高山。その雄大さを前
景に、飛行機はいま透き通る小さな生命
体となる。第四首、人々の喜びのため休
みなしに観覧車を回しつつける大きな手。
ときには仕事を放ってサボってもいい。

選 評